

ぴぴたの竹笛

権むくげ なほ

学校からバスで一時間、それから木々のおおい茂ったくねくね道を登ること二時間、ようやく山のとっぺんにたどり着いた。

「さあて、おまちかねのお弁当の時間でよ」
先生が言い終わらないうちに、こどもたちはわあいと散り散りになった。

「ごみは持って帰ること。それから遠くへは絶対に行かないこと。分かりましたね」

先生がそう付け加えたけれど、もう誰も聞いていないようだ。

亮は、みんなから少し離れた場所に一人で座った。

「ぼくのお弁当、からあげが入ってる！」
「私、いちご入れてってママに頼んだの」

しばらく歓声があがって、それからみんな、いきおいよく食べ始めた。

亮もふたを開けてみた。

「ああ、やっぱり……」

心配していた通りだった。中身はかぼちやとだいこん、それにとり肉のもの。ごはんの上にはうめぼしが一つ。

「これじゃ、おでんみたいだ……」

亮はため息をついた。お母さんが作ったなら、もっとすてきなお弁当だったろう。

そして誰からも見られないように、急いで食べ始めた。

亮の家には今お母さんがいない。病院に入院しているのだ。お母さんのおなかに赤ちゃんがいて、その赤ちゃんの具合が悪いらしい。

仕事で帰りの遅いお父さんに代わって、おばあちゃんが泊まりがけで手伝いに来ている。そんな生活がもう十日ほど続いている。

おばあちゃんは、普段は亮の家から電車で二時間も離れた村に、一人で住んでいる。背が小さくてしわくちやな顔で、いつも真っ白のかっぱう着を着ている。

「いつうちに帰って来られるの？」

お母さんが入院すると決まったとき、亮は一番にそうたずねた。

「長くなるかもしれないの。亮、大丈夫な」

お母さんは少しふっくらとしたおなかをさすりながら、心配そうに言った。

「うん……」

お母さんを安心させてくて、亮は歯をくいしばった。

「ぼくは赤ちゃんなんかほしくないんだ……」

それ以来、気がつくとき亮はいつもそうつぶやいていた。

お弁当の後はおやつの間だ。グミとポテトチップスとチョコレートバー、それにラムネを買った。ラムネのおまけには、集めているアニメのカードがついている。

「どうか虹色カードが出ますように」

そう言いながら、亮はリュックの中に手お

つつこんだ。

けれど、あれ……？

おかしの袋が見つからない。

「あっ」

頂上に着く少し前に、のどがかわいてお茶を飲んだことを思い出した。

そうだ。あの時、底に入っていた水筒を取るために、おかしの袋をリュックから出したんだっけ。そして……、

「そのまま忘れちゃったんだ！」

亮は慌ててあたりを見回した。先生は見当たらない。みんなはおかしに夢中だ。

「すぐそこだし、取りに行くくらいいっか」

亮は荷物をそのまま置いて、さつき来た道に戻り始めた。

「あ、ここだ」

しばらく下ると、いすのような切り株が見えた。そこに腰かけてお茶を飲んだのだ。

けれど、袋はどこにも落ちていない。

「変だな、このへんのはずなんだけど……」
その時。

ザザザザ!

突然、あたりの木々がざわめいた。枯れ葉が亮の肩に、足もとに、降ってきた。

見上げると、空があやしく黒ずんでいる。

亮はなんだかこわくなってきた。

「おかしはいいや。もう戻ろう」

そう言い聞かせて、立ち上がった瞬間、

「おかしってこれのこと？」

どこからか声が聞こえた。

亮はおどろいて、あたりを見渡した。

「ここだよ、ここ、ここ」

声は頭の上から聞こえる。

はっと、見上げたその先には……、

「うわああ！」

亮の背の三倍くらいありそうな木の上に、誰かが立っているのだ。

「ちよつと待ってて。今降りるよ」

声の主はそう言うと、両手をぱっと広げ、

地面めがけていきおいよく飛び降りた。

バサッ！

亮は思わずしゃがんで、手で顔をおおった。
あんな高い所から飛び降りて、平気なはずがない。

指の間から、そおつとのぞき見てみた。

「へへ」

そこにいたのは……、

「お、おに！」

そうなのだ。

目の前に、おにが立っていたのだ。

赤い顔にげじげじまゆげ。もじやもじやの
髪の毛に、つんととがった角が一本。葉っぱ
とわらでできたような服を着て、ぞうりをは
いている。

「びっくりした？」

しゃがんだ亮とちょうど目線が同じだ。こ
ちらを見てはにかんでいる。

「お、お、お、おどろくに決まってるだろ」

亮はしどろもどろにそう言った。

「ごめんよ。おかしって言ってたからさ。これのことかなって思ってた」

おには、手に持った袋を顔の前に上げた。

「あ、それ、ぼくのだ」

その袋は、確かに亮が落としたものだった。

「返してよ」

「う、うん。返すけどさ、実はさ……」

気まずそうにいいじしている。

「なんだよ」

「ごめんよ。おかし……食べちゃったんだ」

そう言って、おには袋をひっくり返した。

中から出てきたのは、おかしのからばかり。

「あんまりおいしかったから、つい……」

「ひ、ひどいよ。あ、カードは？　カードは

残ってるだろ」

ラムネのおまけのカード。楽しみにしていたのだ。

「それって、これ？」

おには、わらの服からカードを取り出した。

きらきらに光っている。

「虹色カードだ！」

ついに当たったのだ。

「もういいよ、それを返してくれれば」

亮が手を出した。

けれど、おには手放さない。

「これ、ちようだいよ。こんなきれいなもの、おいら、見たことないよ」

大事そうにカードを握りしめている。

「返せよ、それ、ぼくのだろ！」

亮がどなって手を伸ばした。するとおには、ひよいとすばしっこくよけた。

「じゃあさ、返すかわりにおいらの修行を手伝ってよ。おいら、一人ぼっちなんだ」

「え……？ どういうこと？」

「六歳になったら、おには一人前になるための修行に出なくちゃいけないんだ。それで、立派なおになるまでうちには帰れないし、かあちゃんとも会えないんだ」

おにはうつむいて、もじもじとしゃべった。
かあちゃんに会えないんだ。

その言葉が気になった。なんだか自分と似ている。

「わ、わかったよ。無事に修行が終わったら、その時はカード返してくれよな」
するとおにはぱっと笑顔になった。

「ありがとう、ありがとう。おいら、人間の
世界で修行して、一人前のおにになる！」

そう言って飛び上がると、亮に抱きついた。

「こら、やめろよ。あ、ぼくは亮。そっちは
なんて名前なの？」

「おいら、おにのこびびた。よろしく！」
そしてふたりは握手をした。

とは言ったものの、どうしたらいいだろう。
ぴびたと山道を登りながら、亮は早くも途
方にくれていた。

先生や友達がぴびたを見たら、腰をぬかす
に決まっている。見つかる前にこっそりリュ
ックにかくそうか、それとも……。

そんなことを考えているうちに、頂上に着い

いてしまった。

「ぴぴたはちよつとここで待っててよ」

亮がそう言って振り返ると、

「あれ？」

ぴぴたがいない。慌てて探すと、ずんずん歩いてみんなの近くに行ってしまった。

「しまった！」

けれど、まわりの様子は変わらない。だれもぴぴたに気が付いていないようだ。

亮はぴぴたのそばにかけ寄った。

「みんな、おどろかないのかな」

「大丈夫。おいらの姿は見えないんだ。信じている人しか見えないんだよ」

「じゃあ、みんな信じてないってこと？」

「もちろん。おになんてこの世にいないって思ってるだろ。けれどおいらたち、しょっちゅう人間の世界に行くんだよ。公園にだって水族館にだって行ったことあるんだ」

ぴぴたは自慢気にそう言った。

亮はみんなに変に思われないように、それ

からずつとだまっていた。ぴぴたは他の人には見えないのだから、もし話していたら、亮が独り言を言っているように見えるはずだ。そんな亮の心配をよそに、ぴぴたは先生のかぶっているぼうしをひよいと取ったり、遠足のしおりを読んだり、せわしなく動き回っていた。

「お婆あちゃん、ただいま！」

家に帰り着くと、かっこうだけのあいさつをすませて、一目散に二階にかけ上がった。

「ここが亮の部屋かあ」

あんなにはしゃいでいたのに、ぴぴたはまだ元気いっぱいだ。

「それより！　これからどうするんだよ。修行っていっても、一体何をすればいいんだよ。一人前の立派なおについてどんなおになんだよ」

亮は思っていたことを、まくしたてるようにしゃべった。

ぴぴたは亮のいきおいにおどろいて、あんぐりと口をあけた。それからごほんの一つ、せきばらいをした。

「角がはえかわるんだ。今はこの一本だろ。でもこれが抜けて、もっと大きい二本の角がはえてくる。それが一人前の証ってわけ」

ぴぴたは、もじやもじや頭の上にちよこんとついている角を触りながら言った。

「とうちゃんは、熊を倒して一人前になったって言った。じいちゃんは、火事で火を吹き消した時一人前になったって。山にかける橋を作って一人前になったって。話も聞いたことがある」

「つまり、答えなんてないってことか……」
その時、一階から声が響いた。

「亮ちゃん、おやつ食べにいらっしやい」
おばあちゃんだ。

「それどころじゃないんだけどな……」

亮はそうつぶやきながら、でもあやしまれるといけないので、しぶしぶ居間に下りてい

った。ぴぴたもその後をついていく。

「ま、いっか。どうせ見えないだろうし」

テーブルに用意されていたのは、おばあちゃん特製のおまんじゅうだった。

「いつもこれで悪いねえ」

おばあちゃんがそう言って、亮の方を見た。

「あれまあ」

目を丸くしている。

「小さなお客さんが一緒だったんだねえ」

ぴぴたを見てにっこりとほほえんだ。

「え！ おばあちゃんぴぴたが見えるの？」

今度は亮が目丸くする番だった。

「見えるとも。なんとかわいっこおにだこ

と」

おばあちゃんは、しゃがんでぴぴたの頭をなでた。

「こんにちは。おいらぴぴたっていいいます。

今日からお世話になります」

ぴぴたはそう言って、ぺこりと頭をさげた。

「ちえ、調子いいやつ」

こっちは修行のことで頭がいっぱいだった
いうのに。

「どうしてこおにがこんな所にいるのか
い？」

おばあちゃんに聞かれて、亮は今日の遠足
であった出来事を全部話した。

「なるほどねえ、こおにが修行にでるって話
は聞いたことがあったけれど、まさか人間の
家に泊まるなんて、時代も変わったもんだ」

「おばあちゃん、修行のこと知ってるの？」
「もちろんさ。おばあちゃんの住む村には、
昔からそんな言い伝えがある。おにを見たの
は初めてだけどねえ」

ぴぴたは大きな目をきよろきよろさせて、
まるで人事のように二人の会話を聞いている。

「どうやったら、立派なおにになれるかな」

亮の言葉に、おばあちゃんは少し考えると、
「まあまあ、とりあえずおまんじゅうを食べ
なさいな」

ほほえんでそう言った。

次の日、

「起きてよ、起きてよ」

ぴぴたにゆすり起こされて、亮は目を覚ました。

「わっ！ あ……、そっか、ぴぴたが一緒だったんだっけ」

思い出すのに少し時間がかかった。なにしろ、おにがベッドのとなりにいるのだ。

「もう朝だよ、起きてよ、おなかすいたよ」
窓の外は、まだうすぼんやり紫色だ。

「まだ夜だよ。誰も起きてないよ。それに今日は学校行きたくないんだよなあ」

今日は、亮の苦手なりコーダーの授業がある日だ。

ぴぴたにせかされて仕方なく一階に下りると、すでにおばあちゃんが朝ごはんの準備をしていた。

「おばあちゃん、こんなに早くから起きてたの？」

「あら、亮ちゃんおはよう。だってお父さんのお仕事早いでしよう。お弁当だって作ってあげなきゃならないしねえ」

「うわ、このお弁当おいしそうだ」

ぴぴたが、テーブルの置いていた作りかけのお弁当を見て飛び上がった。

「そうだ。ぴぴたも一諸に学校に行くでしょう。給食の代わりにお弁当作ってあげようね」

「わあい。ありがとう、おばあちゃん」

そんなぴぴたの姿を見て、亮は胸が苦しくなった。

昨日、お弁当ありがとうと言えなかった。

ごちそうさまも言わずに、台所に置きっぱなしにしてしまっていた。

なんだか居心地が悪くて、亮は顔を洗い洗面所へかけて行った。

「いいか、静かにしてるよ。中にはぴぴたが見える人だっているかもしれないし。気がつ

かれたら大変だぞ」

家を出る前、亮はぴぴたに何度も念を押し
た。

ぴぴたは何も気にしていない様子で、のん
きに道に落ちていている枯れ葉を拾い集めている。

「そうだ、お弁当をぴぴたが持ってたら、お
弁当だけ宙に浮いてるように見えないかな」

「へへ、そう思っつて、こうやって：」

ぴぴたはお弁当の包みの上に枯れ葉をひら
ひらとかけ、何やら呪文をとなえた。

「これで大丈夫。もうお弁当は人には見えな
いはずだよ」

「へえ。おにつて魔法も使えるんだなあ」

「もちろん。木から木に飛び移ったり、動物
と話したりもできるんだ」

そんなことを話しているうちに、あつとい
う間に学校に着いた。

午前中は亮の心配をよそに、何事もなく終
わった。

授業中ぴぴたが黒板に字を書いたり、給食

の残りもののゼリーをいつのまにか食べていたりして、「教室にうれしいがいるんだ！」
ってみんなをこわがらせてしまったけれど……。

そして午後一番、音楽の授業が始まった。
一週間後に、保護者の見に来る大きな発表会がある。そこで披露する曲を練習するのだ。

「先生の後に続いて、やってみてください」
ドドドー シシシー ラララー ミドソー
みんな先生のまねをして吹き始める。

亮ははじめの高いドの音が出せず、指が止まってしまった。

「高田くん、ドの指できる？　こうですよ」
先生が教壇から手を上げて、ドの指をしてみせた。

「はい……」
亮は自分の指の位置を確認した。

「じゃあみんな、もう一回」
さっきのフレーズを繰り返す。けれど、今

度はドからシに指を変えることができない。

そんな亮の様子を、ぴぴたはとなりで心配そうに見ていた。

そして、急に教室から飛び出すと、どこかに行ってしまった。

ぴぴたが気になったけれど、かまっているひまはなかった。何しろ亮がうまく吹けないせいで、曲がなかなか進まないのだ。

「高田くん、おうちでも練習してきてね」

何度もつまずく亮に、先生はそう言った。

もうすぐ発表会があると知った時、亮だっ
てはじめは一生けん命に練習したのだ。苦手
なりコーダーも、お母さんが見に来てくれる、
そう思うとがんばれた。

けれどお母さんの入院が決まって、発表会
までには退院できそうにないと知ってからは、
投げやりになっていた。

だれも自分の気持ちなんて分からないんだ。
そんな思いで胸が張りさけそうだった。

結局少しも吹けないまま、授業は終わってしまった。

ぴぴたはどこに行っちゃったんだろう。

放課後、だれもいなくなった教室に一人残っている、ぴぴたが笑顔で戻ってきた。

「心配しただろ。何してたんだよ」

「ごめんよ。おいら、いいもの作ってたんだ」

そう言って何か差し出した。竹に点々といくつか穴があいてあって、それはまるで……、

「あ、リコーダー！」

そうなのだ。竹でできた手作りの笛なのだ。

「おいら、これ吹けるよ」

そう言って、ぴぴたが竹笛を吹き始めた。

ピーピヨロピヨロ　　ピーピヨヨピヨロ

ピッピ　　ピッピ　　ピーポピ

それは今まで聴いたことのない、不思議できれいな音色だった。

すると突然、教室のカーテンがふわりと揺れた。窓から気持ちいい風が入ってきた。

外で、鳥の歌うような泣き声もする。

「ふふ、みんな喜んでるよ。風も鳥もみんな」

ぴぴたがうれしそうに言った。

「すごいな。これも魔法なの？」

「違うよ。心を込めて吹いたらきれいな音が出る。もしたら、それを聴いたみんなも喜ぶ」

「そうなんだ……」

「亮だって、練習したらきつとこんな音色で吹けるようになるよ」

「それで、この竹笛を……？」

「へへ、一緒に吹こうよ」

ぴぴたの笑顔に押されるように、亮はうんとうなずいた。

「そうこなくっちゃ」

ぴぴたはにっこり笑うと、亮の手をぎゅつと握った。

それから亮は毎日リコーダーの練習をした。

学校の休み時間は、大好きなドッジボールを休んで練習をした。放課後うまくできないところを先生に教えてもらった。帰ってからはおばあちゃんに聴いてもらった。ぴぴたとは夜遅くまで一緒に吹いた。

一週間後、発表会の日がやってきた。

「おいら、ステージには上らない。客席でおばあちゃんと座って見てるよ」

朝、ぴぴたがおばあちゃんにそう言った。

「いいのかい？ おばあちゃんは一人でもいいんだよ」

「うん、いいんだ。おいらも亮が吹くところを見たいんだ」

「じゃあ、ぴぴたはあとでおばあちゃんと一緒に、学校に行こうかねえ」

亮はおばあちゃんとぴぴたに見送られ、学校へむかった。

毎朝ぴぴたと通っていた道を、一人で歩くとさみしかった。発表会のことを考えると緊

張もしてきた。

最初のクラスは合唱だった。その次のクラスはカスタネットとピアノカを演奏した。

そしていよいよ亮のクラスになった。

亮はちょうど、体育館のステージの真ん中に立っていた。どこにおばあちゃんとぴぴたがいるのか、ここからは見えない。それに前を向いているとドキドキしてきて、ついうつむいてしまう。

先生が指揮棒をふった。

ドドドー シンシー ラララー ミドソー
亮はふるえる指を必至で動かした。のどがカラカラで、息つきもうまくできない。

あっ、ひとつ間違ってしまった。

その後が続かない。手がもつれるみたいだ。

その時、視界のはしに何かが見えた。ちらりと見るとぴぴたがいた。天井に頭がつきそうなほどに高く、ジャンプしている。

「がんばれ、がんばれ」

ぴぴたの声が聞こえた気がした。

亮はうんとうなづくど、指の位置を確かめて吹き始めた。

今度はなんだかスムーズにいった。気持ちがあだんだん盛りあがってきた。

その時だ。

バババツ！

大きな音をたてて、たくさんの小鳥たちが、体育館の窓からいっせいに入ってきた。

リコーダーの音に合わせてるように、天井を舞っている。まるで、小鳥たちも発表会の一員のようなのだ。

客席がざわついた。リコーダーを吹いているこどもたちも、次第に小鳥に気がついた。

そして、みんなのリコーダーの音が、ますます跳ねるように楽しくなってきた。

曲に合わせて、小鳥が踊りさえっている。

これは、ぴぴたの魔法？

それとも……。

演奏が終わった。

それと同時に、小鳥たちはわれにかえったように、窓からさーっと飛んで行った。

一瞬あたりがしんとなった。

そして、次の瞬間。

客席から歓声があふれた。

体育館中に響く、いつまでも鳴りやまない拍手とともに。

亮が前を向くと、拍手するおばあちゃんと、おばあちゃんのひざの上で竹笛を振っているぴぴたが見えた。

「ありがとう、ぴぴた」

亮がつぶやくと、ぴぴたがにんまり笑ったのがわかった。

発表会の後、三人で歩いて帰った。

「亮ちゃん、よかったよ。とっても上手にできてたねえ。そうだ、いい話があるんだよ。朝電話があってね、お母さん明日帰ってこられるって」

「ほ、ほんとに？ やったあ！」

夢みたいだった。リコーダーが上手に吹けて、発表会が成功して、その上お母さんが帰ってくるだなんて。

すると、

「あ……」

ぴぴたが立ち止まった。

「どうしたんだよ」

「あ、頭がなんだかむずむずするんだ」

そして、

「わああ」

三人同時に声をあげた。

ぴぴたの頭についていた角がポロリと取れて、地面に落っこちたのだ。

「見て、おばあちゃん！」

亮が目にしたのは、落っこちた角のかわりに新しくはえた、小さな二本の角だった。もじやもじやの髪の毛に隠れるようにして、でも確かにしっかりとはえている。

「ぴぴた、やったよ！ 一人前のおになれたんだ！」

亮はぴぴたの手をとって叫んだ。

けれど、ぴぴたはぼんやりしている。

「うれしくないのか？」

「う、うん……。なんだか、夢みたいで：

……」

その時。どこからともなくなま温かくて、
体を包み込むような風が吹いてきた。

同時に、枯れ葉が舞ったかと思うと、どん
どん集まって、竜巻のように大きなうずにな
った。

そして、その枯れ葉のうずがぐるぐるん
と回りながら、亮の目の前に降りてきた。

「な、なんだろう……。：：：」

風が止み、枯れ葉がバサツといっぺんに地
面に落ちた。

そのうずの中に立っていたのは、

「かあちゃん！」

ぴぴたが大声でかけ寄っていった。

「ぴぴたの、お母さん？」

ぞうのように大きくてなんだかこわいけれ

ど、よく見るとぴぴたとそっくりのやさしい目をした、赤いおにだったのだ。

「ぴぴたがお世話になりました。今しがたこどもの角が取れたと、風の声を聞きました。

それで、山から迎えに来たのです」

ぴぴたのお母さんは、深々とおじぎをする
とそう言った。

「そうか、もう修行は終わりなんだ……」

ぴぴたはちらりと亮を見た。

「仕方ないだろ。ぴぴたの住む所はここじゃないんだから……」

「じゃ、これ返さなくちゃ」

ぴぴたはわらの服のポケットから、紅色カードを取り出した。

「……いいよ、それやるよ」

「え、いいの？」

「うん」

「ありがとう、じゃあ、かわりにこれ」

ぴぴたは竹笛を差し出した。

「亮がこれを吹いたら、おいらいつでもかけ

つけるよ。さみしくなったらこれを吹いてよ」

「さみしくなんか、ないやい」

そう言いながら、亮は竹笛を受け取った。

急に涙が出てきた。

「さみしくなんか……、ないやい」

もう一度つぶやいた。

そして、ぴぴたを抱きしめると、思い切り泣いた。

夜、ベッドに入ると、なんだかがらんと広く感じた。

「そっか、今までぴぴたと一緒だったもんな」

ぴぴたは今頃どうしてるだろう。お母さんやお父さんとお祝いをしているだろうか。

その時、部屋をノックする音が聞こえた。

「亮ちゃん、ちよつといいかい？」

おばあちゃんだった。

「おばあちゃんね、明日お母さんが帰ってき

たら、村に戻るよ」

「え……？」

「畑もあるしね。ちよつとの間だったけれど、楽しかったよ」

「おばあちゃん……」

「じゃあ、おやすみね」

腰の曲がった小さな後ろ姿。亮は思わず、かけ寄って行って、おばあちゃんの背中に抱きついた。

「おばあちゃん、ありがとう、ありがとう」

涙があふれてきた。

「ふふふ、どうしたんだい。今日は泣き虫だねえ」

おばあちゃんの笑顔がにじんで見えた。

その夜はなかなか眠れなかった。ぴぴたが去って行って、おばあちゃんも帰ってしまった。

竹笛を握ってみた。あのきれいな音色が聴こえてきそうだ。

吹きたいな……。

そう思った。

けれど、そんな気持ちを打ち消すように、首をぶんぶん振ってみた。

「ぴぴたはきつと、ぼくのリコーダーの手助けをして一人前になったんだ。ぼくだって一人前になってから、ぴぴたに会うんだ」

明日の朝早く起きて、おばあちゃんのお料理を手伝おう。

お母さんが帰ってきたら、笑顔で迎えよう。赤ちゃんが生まれたら、お世話だっぞ。

いっぱいいっぱい決意した。

その時、窓の外で風の音がした。

ぴぴたががんばれって、応援してくれていてみたいだった。